



きょうは世界環境デー

川面に浮かんだ黄色い葉が揺れ、小さな波紋を描く。岸の近くではマングローブの根が波打つように広がり、近くに小さなカニが身を潜めていた。東シナ海に浮かぶ、約290平方*の西表島(沖縄県竹富町)。島の面積の約9割が亜熱帯の森林で、河口付近などには日本最大のマングローブ林が広がる。



新毎日

西表島 命抱くマングローブ



満天の星を背にするヤヤマヒルギ。沖縄県竹富町の西表島。5月12日、猪俣健治撮影

マングローブは、潮の満ち引きに影響を受ける「潮間帯」に生える植物の総称だ。西表島は国内に分布する7種全てを見ることができ、「命のゆりかご」として多様な生物を支えている。

5月中旬の雨の日の朝、島の北西を走る浦内川河口からカヤックで上流へ向かった。国内で最も魚種に富んだ川で、希少種を含む400種類以上の魚が確認されている。潮が満ちると上流約10*まで海水が遡上し、淡水魚と汽水魚が交ざる。

支流のウタラ川に入ると、両岸のマングローブ林に風が遮られ、雨粒が木々や水面をたたく音がよく聞こえるようになった。こぎ進めるほど川幅は狭まり、川底も迫る。

午前の満潮の時刻を少し過ぎたころ、雨が弱まった。マングローブの枝葉の合間から光が差し込み、水面がきらきらと輝いた。

西表島は、黒潮の暖かい空気などによって大量の雨に恵まれる島だ。

「雨が降ると、森の養分が雨水とともにマングローブ林に運ばれる。そこにすむ生物が養分を適度に吸収し、最終的には海に流れて海藻やサングを育てる。そしてまた海の水が雨となって島に戻る」。50年近く西表島に住む、ベテランのネイチャーガイド、森本孝房さん(67)はこう話す。「島はその循環の中にある。生物にとって雨は大事なんだよ」

過酷な環境耐える ユニークな仕組み

マングローブは常に水にさらされる不安定な土壌や海水に含まれる塩分に耐えられるよう、種ごとにユニークな仕組みをもつ。

マングローブのうち、ヒルギ科の「オヒルギ」は、膝を折り曲げたような形の根「膝根」を張り巡らせる。水中でも酸欠にならないよう、地表に無数の根を露出させて呼吸している。水に含まれる塩分は古くなった黄色い葉のため、落葉させることで排出する。

干潟や水面に落ちたオヒルギの葉はカニや貝のエサとなる。干潮が近づき、水につかっていた根が徐々に地表に現れると、鳥がやってきて根元にいた生き物を仕留める。別の生き物のフンや死骸もまた、分解されて循環の輪に入る。その循環の中に西表島がある。「全ての生物がつながりの中で生きていくんだ」。森本さんがつぶやいた。

夕方に干潮を迎えた。日が落ち、島が暗闇に包まれると、森の中ではカエルやヘビが活動を始めた。タコのような根に支えられたマングローブ「ヤヤマヒルギ」を満天の星が照らした。

6月5日は国連が定めた「世界環境デー」。2021年に奄美大島(鹿児島県)などとともに世界自然遺産に登録された西表島で、生物多様性の意義を考えた。【高橋由衣】